

令和８年度北部地区（児玉・大里）人権教育実践報告会報告者・テーマ一覧

分 科 会 名	報 告 者	テ ー マ
女 性 （ 男 女 平 等 ）	深谷市立桜ヶ丘小学校 成田 有香	一人一人が自分らしく活躍できる男女平等教育の実践 ～互いに認め合い、自らの意思によって行動できる児童 の育成～
	上里町立賀美小学校 清野 孝子	豊かな人権感覚を育み、自分を大切にするとともに、 他者の大切さも認めることができる児童の育成 ～発達段階に応じた男女平等教育の推進～
こ っ 子 ・ インターネット による人権侵害	本庄市立中央小学校 倉林 理恵	人をいたわり、素直な心と学びが輝く児童の育成 ～成長とその過程を大切に、相互に認め合う 教育活動の推進～
	神川町立神泉小学校 丸岡 祐介	「誰一人取り残さない」教育活動の実践 ～自ら未来を切り拓く児童の育成～
高 齢 者	熊谷市立妻沼小学校 増田 和江	地域と連携し、体験的な学びを通した社会で生きる 人権感覚の育成 ～高齢者にやさしいまち妻沼～
	埼玉県立本庄高等学校 吉田 光希	地域の高齢者との関わりと授業実践を通した人権教育
障 害 の あ る 人	深谷市立本郷小学校 藤野 光沙	自他のよさについて認め合い、支え合える児童の育成 ～人権感覚をより高め合うために～
	美里町立大沢小学校 高須賀 亜理紗	ともに生きる～自分もみんなも大切に～
同 和 問 題 （ 部 落 差 別 ）	本庄市立旭小学校 山崎 勇希	本庄市立旭小学校における同和教育
	寄居町立寄居中学校 岡本 和也	『夢に向かい、互いを尊重する人権教育の推進』 ～自他と地域のウェルビーイング向上を目指して～
外国人	熊谷市立熊谷東小学校 小林 嵩彦	熊谷市立熊谷東小学校における国際理解教育
	埼玉県立熊谷商業高等学校 小松 剛	埼玉県立熊谷商業高等学校における異文化交流の実践 ～様々な背景をもつ人々との協働していく態度の育成～

熊谷市立熊谷東小学校における国際理解教育

熊谷市立熊谷東小学校

小林 嵩彦

1 はじめに

(1) 地域・学校の概要

ア 熊谷市は、埼玉県北部に位置する人口約19万人の都市で、北部地域の経済的中心地として発展している。また、日本さくら名所100選の熊谷桜堤や、埼玉一の祇園とされる熊谷うちわ祭など、歴史と文化を感じる名所やイベントが豊富である。

イ 本校は、1873年創立という長い歴史を持つ伝統校である。毎時間「号令をかけない礼」や、学習の理解を深める「構造的な板書」など、落ち着いた学習環境での教育活動にあたっている。昭和2年3月、アメリカの世界児童親善会から日米親善として贈られた青い目の人形「ナンシージェーン」が学校のシンボルであり、現在も校長室から児童たちを見守っている。

(2) 研究テーマとの関わり

本校の研究主題は、「日本社会に根差したウェルビーイングの向上」である。自己肯定感などの獲得的要素と、人とのつながりなどの協調的要素をバランスよく取り入れた日本社会に根差したウェルビーイングを、教育を通して向上させていくことが求められる。しかし、本校で実施したアンケートでは、「自分にはよいところがある」や「自分の意見が伝えられる」という項目で課題が見られた。そこで、異なる文化や価値観に触れる機会を生かし、外国の人々や文化を尊重し、共に生きていこうとする態度を身に付けさせることで、他者を大切にすると同時に自分のことも大切にすることを育んでいきたい。

2 具体的な取組

(1) 主体的に外国の人とコミュニケーションを図ろうとする児童の育成

ア OBL (Online Blended Learning) 年3回実施

5・6年生を対象とした熊谷市独自の取り組みであり、タブレットを使ってオンラインで様々な国のの人たちと英語で会話をする学習である。小学生ペアに対して一人のネイティブスピーカーがローテーションで付き、あいさつや簡単な会話を繰り返していく中で外国語コミュニケーションの素地を育てていく。



「OBL 活動の様子」

イ 修学旅行での活動

(ア) 訪日外国人とのコミュニケーション

鎌倉散策の中で、観光に来ている外国人に積極的に話しかけ、簡単な会話をを行った。



「訪日外国人との会話の様子」

(イ) 東京グローバルゲートウェイ (TGG) での経験

東京都教育委員会と株式会社 TOKYO GLOBAL GATEWAY が提供する施設で体験型学習を行った。海外にいるような環境で、「英語を“学ぶ”のではなく、英語を“使って体験する”」ことをコンセプトとしており、多国籍のスタッフとの交流を通して成功体験を積んだ。



「TGG での活動の様子」

(2) 協働的な学びで他者理解と自己肯定感を高める取組

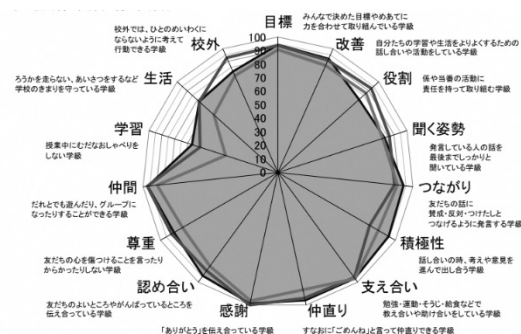
ア 協働的な学びの取組

児童が主体となって授業を進めていく活動を取り入れた。児童が授業すべてを展開していくのではなく、例えば、国語で新出漢字を教えたり、外国語で Greeting や Warming up で質問をしたりする。このように、考えたことを相手にわかりやすく伝えようとする時間とすることで、コミュニケーション能力育成の効果を狙っている。

イ 自己肯定感を高める取組

学級力アンケートを実施し、チャートの結果から各クラスの実態を把握した。その後、各クラスで出た課題を解決するために話し合い活動を行った。

6月、10月、12月と年3回実施することで、年間を通してクラスの変容を見つめ直す機会となり、また一人一人の意識や行動が学級力には不可欠であることを実感させた。併せて、4年生以上は総合質問紙調査「i-check」も活用することで、自己肯定感やソーシャルスキルなど様々な視点で、一人一人の個性や心のありようを立体的に捉えた。



「学級力チャート」

3 成果と課題

(1) 成果

外国人と接する機会を増やすことによって、5年生の時より他国のことに興味をもち、外国人に抵抗なく積極的に英語で話そうとする児童の姿が見られた。また、ただ聞かれたことに単語のみで答えるだけでなく、自分のことを詳しく相手に伝えられるようになったり、相手のことを理解しようとしたりと、2年間で系統的に学習した成果が顕著に現れていた。

自己肯定感を高める取組により、「自分の考えを言ったり話し合ったりできる」と答えた児童が86%→89%に、「自分にはよいところがある」と答えた児童が89%→90%と増えた。

(2) 課題

今や外国は未知の地ではなく、来日している外国人も多く見られる。グローバル化が進む現代において、児童が将来、多文化共生社会を目指し「課題を捉え・自分で判断し・解決していく」資質を培っていくことが今後の課題である。そのために、人権感覚に関するアンケートを今後も実施し、自分の大切さを認める中で相手のことも認め理解しようとするスキルを培っていきながら、思っているだけでなく具体的な態度や行動に表すことのできる児童の育成を図っていく。

埼玉県立熊谷商業高等学校における異文化交流の実践 ～様々な背景をもつ人々と協働していく態度の育成～

埼玉県立熊谷商業高等学校
小松 剛

1 はじめに

(1) 地域・学校の概要

ア 本校は大正9年に「熊谷商業学校」として創立され、今年で創立107年目を迎える高等学校である。開校以来、「向上」を校訓として定め、激動する社会情勢や教育課題を克服しながら、一貫して地域に根ざした教育活動に取り組んできた。令和2年度には新たに「総合ビジネス科」を創設し、生徒一人一人の多様な進路希望を実現するための取組を強化している。また、情報端末を活用するなど、授業での探究活動におけるICT教育の推進も図っている。

イ 本校の所在する熊谷市は、現在外国人人口が5,270人に達し（令和7年住民基本台帳人口参照）、総人口190,927人（同調査参照）に占める外国人人口割合もおおよそ2.8%となっている。こうした地域社会の変容は本校の生徒構成にも反映されており、保護者が外国籍である、あるいは家庭内での母語が日本語以外であるなど、外国にルーツをもつ生徒が増加してきている。

(2) 研究テーマとの関わり

本校では、「学力向上と礼節教育を実践し、社会貢献できる専門教養を育成する学校」を目指す学校像として掲げている。その具体的方針として、「お互いに人格を尊重し、的確に自己を表現し、責任と信用を重んじ、協力し合える態度を養い、主権者としての自覚を身に付けさせる」ことを社会的資質の重要な目標の一つに定めている。本校ではこれまでも、人権平和教育講演会や各教科における人権教育を通じ、差別や偏見を排する態度の育成に努めてきた。本報告では、特に「異文化交流」と「多文化共生」に焦点を当て、多様な背景をもつ人々が共生する社会の担い手として、生徒がどのように他者と関わり、協働していく態度を養っていくべきか、その具体的な取組について報告する。

2 具体的な取組

(1) 異文化交流プログラムの実施

ア 内容

県内在住の、スペイン語およびポルトガル語を母語とする講師を招き、小グループでの座談会を実施した。日本での生活の中で感じる楽しさや便利さに加えて、言葉の壁や文化の違いによる戸惑いといった、多様な面を直接聞くことで、「どこか遠くにいる外国人」ではなく、「同じ地域で生活する一人」としての一面を知ることができた。

イ 生徒の反応（抜粋）

- ・講師のお二人の先生方の出身国のことをあまり知らなかったが、今日をきっかけに日本に関心をもって働いてくださる方々のことをもっと知りたいと思った。また、そうした人たちが、銀行口座の開設やアパートの契約の際に、外国人であることを理由に断られることがあると知り、とても悲しく感じた。
- ・文化の違いを知り、より外国のことを知りたいと思った。自分が外国に行った時も、外国の人を受け入れるときも、その国の文化をよく知って、互いに尊重しながら生活することが大切だと感じた。



「異文化交流プログラムの様子」

（２）各教科における人権指導

ア 「公共」

日本の労働力不足と外国人労働者の受け入れ問題を扱い、現在の社会システムが抱える矛盾や課題を批判的に考察した。また、なぜ熊谷市およびその近隣市町村の外国人が増加しているのかを、労働環境や具体的な企業の取り組みを紹介しながら調べ、発表活動を行った。

イ 「歴史総合」

科目の内容に加え、近現代の日本と諸外国のつながりについて学んだ。特に中国、韓国をはじめとした東アジア諸国やブラジルとの交流の歴史を知ること、前年度に学習している外国人労働者の現状と関連付けて学習した。

3 成果と課題

（１）成果

異文化交流プログラムの事後アンケートには、前掲のとおり外国人に対する人権意識の高まりが読み取れる回答も多くみられた。本校の総合ビジネス科創設に伴う多様な進路選択の中で、国籍やルーツを問わず互いの専門性を尊重し合い、協力して課題に取り組む姿勢が芽生えつつある。

（２）課題

教職員が外国籍生徒の困り感を知り、生徒へ理解を促すことができるような手法を知るための研修の機会は決して多くはない。そのため、今後日本語の使用に不安を覚えている生徒が入学してきた際の、具体的なサポートや行政との連携が滞ってしまう可能性もある。生徒に正しい理解を促進するための土壌づくりとして、今後の課題としていきたい。